

④ 1939-1/2

はつけいのみきやに
八景水谷
④ 1941-2
115708P 桜の名所

地名辞典1019
=平井川

蛇は「うねうね」(蛇)

2,055P-1/4

ニ上の天浮橋
紀上(40P)

五色
(五色彩)

④ 3059-1/2

5703P

「神」うねうね

第三十一章

玉匣

千早振る神々の集い

邪馬台国は、清らかな春の色に彩られ

目映く、絢爛と輝く新王城を出た日御子と
梯傷の二人をはいめとする行列は、二上の天
浮橋を渡り切るとすぐ西方へと折小曲つ

五色の旗をなびかせ、なんと浮き
した足取りの長い列は、洛水(堀川)のほ
とりを、西へ西へひたすら進んでゆく

城南面に沿って西流する洛水(堀川)が

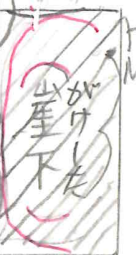
外郭城西面には沿って南流する平井川に
注ぎ込むあたりの名勝の地(今八景

谷)へと到った。合流点の少し南(約一キロ)平井

第二章八章へ神域を流れる川の項参照

せいらん 元1232¹ 晴嵐 晴れ花田のかすみ
 せつ 元2037¹ 雪雪 雪が花に降る雪
 しょう 元599¹ 小林 599¹ 小林 599¹
 やう 元260¹ 小村 260¹ 小村 260¹
 平沙 元1985¹ 山平 919¹ 山平 919¹
 遠浦 元257¹ 遠浦 257¹ 遠浦 257¹
 白く 元2298¹ 江天 元751¹ 洞庭 元1575¹
 落雁 空から舞 1603 落雁 空から舞 1863
 帰帆 元545¹ 帰帆 545¹ 帰帆 545¹
 此所 元783¹ 此所 783¹ 此所 783¹
 洞庭 元1575¹ 洞庭 1575¹ 洞庭 1575¹
 肥後 元82¹ 肥後 82¹ 肥後 82¹
 洞庭 元1251¹ 洞庭 1251¹ 洞庭 1251¹
 洞庭 元2246¹ 洞庭 2246¹ 洞庭 2246¹

川の東岸に位置していた。
 なから肥後国誌に、(水勢の形容)
 岸下清水湧出シテ洶々タリ。且、風景絶
 勝。網利君、此所ニ御茶屋ヲ設ケラル、御遊
 観有リシ地ナリ。今ハ溝口代の下屋敷トナル
 ハ景アル水谷故ニ、ハケノミヤト称セラレン
 トゾ云
 とある。(写真図版 354 ハ景水谷参照)
 つまり、江戸時代前期の延宝年間(一六七
 三)一六八一)当時、ハ景水谷ハ細川網利の
 茶亭が設けられた景勝の地であつたことが分る
 中国でのハ景は、平沙落雁、洞庭秋月、蕭
 山晴嵐、江天暮雪、漁村夕照、をいう。
 相夜雨、煙寺晚鐘、
 田落雁、浮島夜雨、
 鐘、深山紅葉とする。*もつとも、ニ小に
 は色々な異説がある。
 ともあれ、龍田山と熊ノ岳(金峰山)との
 狭間に清水が湧き、小規模ながら湖水状の地



2,055^P - 3/4

↑カ
ット

- ・カラー
- ・頁の右上(本頁)に掲載下さい。
- ・明るく、できるだけ鮮明にお願いします。

↑



- ・桜らしく見えるようになったら有り難い。

- ・水が、もう少し青くならないでしょうか？ →

140G

写真図版 354 (旧)八景水谷水源地

はけのみや

130G

『おいしいね、さわやかだね、熊本のみず』熊本市上下水道局、平成21年4月発行、19頁参照。

水
晴也カ 座席 831P
2071 左下 HV

$$2.055^{\circ} - \frac{4}{4}$$

⑤ 1941

形が形成されて、いたからこそ、日ハ景水谷の
の名が生まれ、このあたり一帯を曰清水と
いうのであろう。――熊本の地名に井上辰
雄、八二頁。第二十八章（神域を流る川）の項参照

＊

あちこちから、奥に美しい真清水がコンコ
ンと湧き出ていて、澄みきった水面には龍舟
が浮んでいた。そして岸辺には、霞かと思紛う
ばかりにうち続く、淡い色すらも薄紅
色の桜の花が、今を盛と咲き誇っていた。
若開の桜の花の下に、女王日御子と梯儼の
席があった。

すでに、その御座席の前、面々大なる広場に
は、精一杯美々しく着飾った者たちが整然と
居並んでおり、女王の着御をお待ちしていた
今日のこの桜花の宴に列席する為、北か
ら南から遠路はるばる集まってきた貴族
やゆるぎなき達や、常に増して盛装した大
客人達は、それぞれと、茫ち着かない様子
であった。

中々やややにして、女王と梯儼がそれそれ
の席に着座されて、宴が始まった。

可^レハ^ハ累^レ水^ハを^ハ合^ハめ^ハせ^ハた^ハほ^ハど^ハ屈^ハ光^ハ明^ハ媚^ハな^ハ所^ハだ^ハと^ハ表^ハ味^ハで^ハ

280

なに 云 何13 1664

きけい 云 義兄 522 知己 1423 親友 1246 2069 2.057-1/4

伊那口の馬 阿姉 紀上 104 1911-1/2 月 夢 1864 1442 (中秋) 新嘗祭に皇太子 振邪 1749 2065

て、倭王でいらつーやいますね。こころいて、月読命と梯鳥とは、長年の知己のようになつて、語り合つた。伊聲者振邪狗殿、どうぞこの邪馬台国の神酒をお受けください。義兄梯鳥かなみなみと注いだ酒をグイと飲み干した倭国東部の倭王月読命は、何しろ、東の拘奴国は強敵故、寸時といえども手を弛める訳には参りませんでいたが、ところか突然にも一時休戦の渾びとなり、

「待っておりましてぞ。さ、早くこれへお通しなさい。」

望月の色のような美しい黄金色に輝く甲冑を身に着け、鉾を手にした武将月読命は、久しぶりに阿姉に会えたことを喜び、そして、姉の夫君梯鳥に初対面の挨拶をした。貴方様が、倭国の東域を統治しておられ

「亀比売様の弟君、去來紗別尊、伊聲者振邪狗、月読命」が、只今御到着になら小ました。

大太鼓 元368' 暫 元1006' 宴 元191' 篝火 元373' 降 元1967' 紀 元1864' 絶好 元1247'

只中であつた。
 背だけ以上もある火太鼓（大太鼓）は低
 る為に、暫し、女人達の脈やかな群の
 船をおりた女王は、水に濡れた衣服を整え
 ら見る桜木の花もまた、格別に美しかった。
 を滑るように進み、小島をめづつた。船中か
 女王日御子と梯鳥とを乗せた龍舟は、湖南
 層盛り上がり、篝火が皆の顔をさらに赤
 く染めた。
 トル
 花の降り傾る春の宴は、夕暮れ時となり、な
 層盛り上がり、篝火が皆の顔をさらに赤
 く染めた。
 月読命は、さすが武人であり、眼光にも鋭
 さがあつた。そして、動容連止には、不思議
 な聖表が漂つていた。（一応神即位前紀に
 大伴 元へ 昆沙門天 参照）

米

大元 焰= 焰でも可

カ

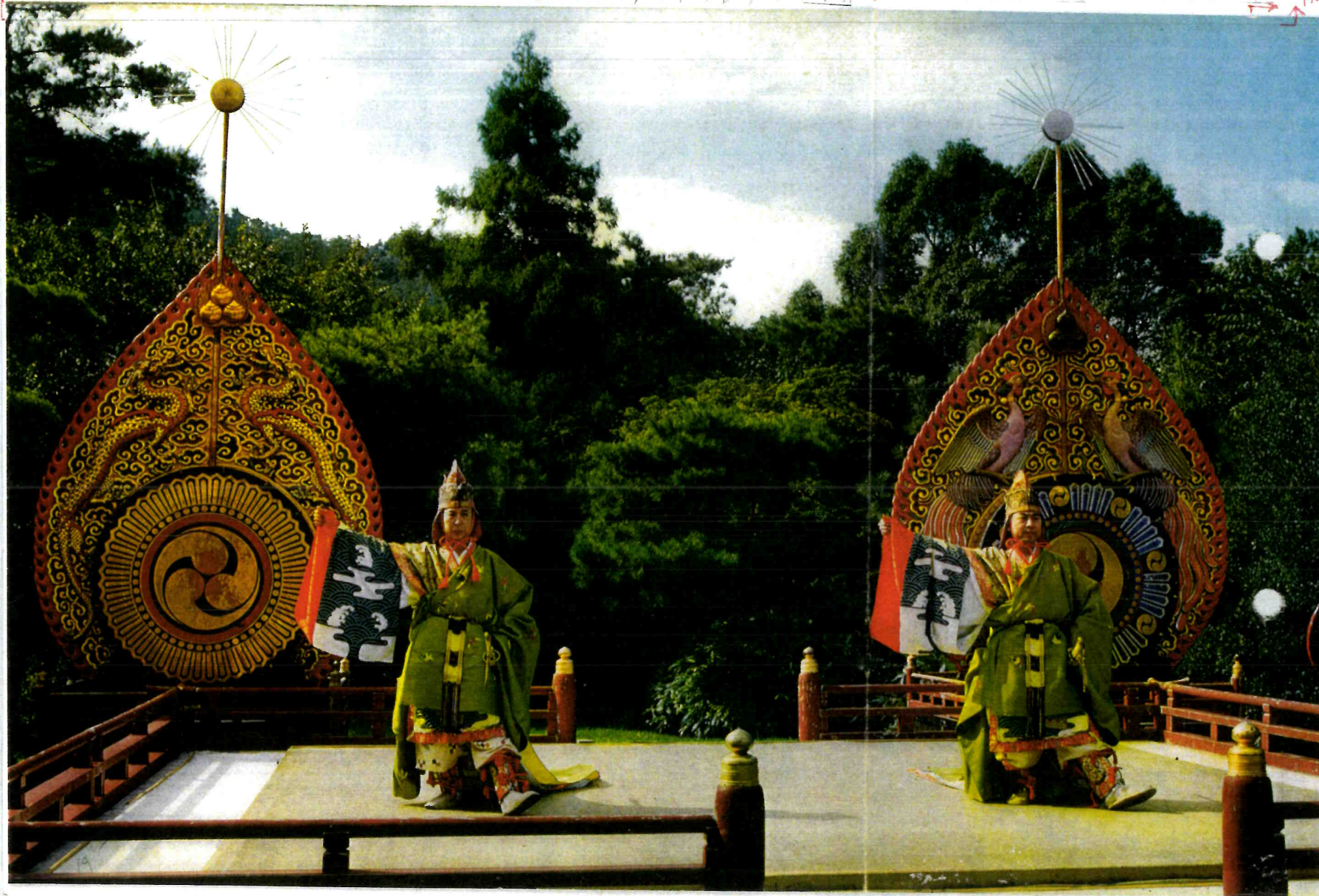
※ 空のヨゴレ、なにかなりませんか。顔は限定一杯はみ出しで掲載する。

2057-34

2057-34

この紙線き、目立たないようにして下さい。

HL



1309

1409

写真図版 355

かえんたいこ
火焰太鼓

『神宮』神宮司庁、昭和49年5月10日発行 19~20頁参照。

は
え
ぐ

かえんたいこ

かえんたいこ

かえんたいこ

かえんたいこ

火焰形の装飾板を持つので、火焰太鼓という。大太鼓の別称である。(広辞苑)

・前回の写真
↑
「火焔太鼓」の
左頁右上に、
¼の大きさが
掲載下さい。

2057^r-4/4



↑↑
カ

「任吉太社」
祭事記」
#38 に写真あり。
写真が有る。
顔かみえり

284

↑
カ

1486
写真図版 256
火焔太鼓の裏側

1386

『任吉太社』神社紀行(28) 学習研究社 2003年6月5日発行 木橋参照。

く。鳴り響き、笛や琴の音に合せての唄や踊り
も面白く、——千早振る神々しい花の集い
は、いつはとも知れず続いていった。
だが、そんなとき梯儂は、胸の奥深くに、
へもーかーたらー
という微かな期待を抱いて、人々の中
に、そつと赤女や愛姫の姿を探していった。
へ見えないうたが、——身内の者が、
あるいは、~~人の~~消息を知っている者が来てい
ないだろうか。

ここに梯儂は、かつての花の宴で見知った
設馬国（薩摩国）の長官・彌彌を認めた。
梯儂は、つかつかと彌彌の前に歩み寄り、
挨拶もろころに尋ねた。
「赤女は、設馬国に帰っていったと聞いて
おります。赤女は達者で居ますか。赤女は元
気でいるのでーようね」
梯儂のあまりにも勢い込んだ問い掛けに、
彌彌は驚愕し、声もなく、ただ梯儂を見つめ
ていた。

44.1.4 (土) 函
H10.7.10 胸潰れ 2156 まどろ
電 下 腹 腹 腹

2059

「あかし 彌彌の驚きの表情は、次第に、苦
痛を示すものへと変わっていった。
「あ。ーむむ」
梯儂は、彌彌のその苦渋に満ちた顔色のう
ちに、ただならないものを感して、まるで詰
問でもしてゐるかのよう返答を迫った。
「赤女は。赤女は今、どこに居るのですか」
「――知らぬ。私は知りませぬぞ」
彌彌は、口元がびくびく震えるのを必死
にこらえて、首を横に振った。
「そうですね。赤女は設馬国に居ないの
です。ね。誰に言うともなくそつと呟くと、
彌彌のそれから離れた。
「赤女よ。赤女よ。どうしているのだ。――
一体、何があつたのだ」
とりとめもなく襲つて来る不安に、胸潰れ
る思ひの梯儂は、血走つた眼で――大鼓
に合せて舞い踊つてゐるハタリの少女畢星
達の輪を見つめていた。幾分年長の
涙の滲む切ない目差でな

由 2058 未2行
前頁未行

二と

1999 55行
2.060 P-1/2
凡472

的中 1522°
当惑 1583°

凡土記 472°

1998 P-1/3
7人の童女 伊勢神宮 114°

「てやかて堅子達が踊り終えたとき、
ハタリの畢星達の内の一人
も、物陰へ連れてゆき、おそろおそろ尋ねて
きた。
「お前はいつも私に親切にしてくれている。
とても嬉しく思っているよ。ところでお前は
赤女の身に何が起ったのか、もーかいたら聞
いていないかい。うん。お前は、何
かを知っているね。
「
畢星は、紅の顔を伏せ、肩を震わせて泣き
崩れた。梯儂の不安が的中していったのであろ
う。
梯儂は、当惑しながらも、まだまだ幼なさ
の残る畢星を優しくその胸に抱き寄せ、自ら
を励ましてこう言った。
「私は決して誰にも言わないから、本当の
ことを教えておくれ。
白く光る涙を一杯たたえた円な瞳の梯儂を
見つめる畢星は、咽んで声にならない声を振

凡土記 472° 55行
下均等

二と

H30(2018)5, 23(9) ~ 5, 24(4回)

IF

2,060^P - $\frac{2}{2}$

→ H4, 1.5(回)

り絞^{しほ}るようにして言った。
「赤^{あか}女^め様^{さま}は、――お亡^なくなりになられま
した。
やつ^{やつ}との思^{おも}いでこう言^いうと、畢^{あめり}畢^りは、後^{あと}を
も見^みず^ず――一^{いち}目^{もく}散^{さん}にかけ去^さっていった。

*

西北西
浴陽

八土記472末
思い国も 324

2.061^P-1/3

1997
八土記4711行
おとせ
電比売

八土記472^P
万2-385
八土記472末2行
59へ

望郷

海若の神の宮の内の重の妙なる殿に帰って

きても、梯僂の心は晴れなかつた。

い、いよいよ吟哀が繁く發り、嗟歎が日

々益していつて、梯僂は替時ぎ込み、うつうつ

と悩み苦しんだ。

そいて、身風流え士の震しくも端正な姿

容に、哀れなまでの深い醫術が宿った。(万巻

九一七四〇「水江の浦島の子を詠む一首」

「丹後国風土記逸文」浦嶋子条参照

乙姫(電比売)は、為す術も知らず、ただオロオロ

と憂えるばかりであつたが、

思いを固めて尋ねてみた。

「比來、君夫の貌を觀ますに、常時と異なる

り、甚く思煩つておいでのようにお

見受けられます。願はくは其の志をお聞かせ

ただだけませんでしうか。

すると梯僂は、遙か西北の方の空を望み見な

11 材 1075⁷

560. 2. 23 ⑥
P

凡上に 473⁷
言葉 如 257

2.061^{P-3/3}
(天の字改行)

狐 ④ 2175^{P-1/2}, 2136^{P-2/3}, 3059^{P-3/11}

凡上に 472⁷ 注 22, 23 論語(里仁) 小人物 1098⁸
凡上に 473⁷ 月土 472⁷ 注 22
小人物 1104³ 供

「新選漢和辞典」

小林信明

小学館

昭和四十二年三月発行

首丘

から、寂しうにこう對えた。は徳を懐い
「私の国(中国)の古人は、曰君子ならぬ
小人は土を憶う。そして、死に臨む狐は自分
の巢穴のある丘の方に死ねる」と書き
残しました
なお、論語(里仁)に、「君子は徳を懐い
小人は土を憶う」とある。
また、
(1) 礼記(檀弓)に、「狐死して正しく丘に首
するは仁也」
(2) 楚辭に、「狐の死するとき、必ず丘に首す」
などがあり、「狐は自分の巢穴のある丘の方に首
を向けて死ぬ」の意で、故郷を忘れないこと
をいう。へ「風土記」日本古典文学大系、岩
波書店、四七二頁、注二二二三頁参照)
梯鶴は、さらに続けて言った。
「僕、古人のこの格言を今まで虚談と以っ
ておりましたか、しかし今は斯、信に然とそ
の通りだと思ふようになった。悲しんでゐるの
です」
(第 309 回 狐 参照)
「まあ、それでは貴方様は、土に帰りたい
」

月土 473⁷
157

大カン 891⁷

- ・カラー
- ・右頁の右上
1/4頁に、
限定一枚は
出して掲載
下さい。

2,061^P-3/3

⇒ カット



↓ カット

井上靖氏の「額田女王」奥付には、ぬかたのおおきみとある
上村松篁氏 11頁末行「ぬかたのおおきみ」とある

13Q4

ぬかたのおおきみ

14Q4 第309回

きつね
狐

『(画集)額田女王』上村松篁 毎日新聞社 昭和44年11月30日発行 39頁参照

* 狐を、『使者』としている場合も多い。

「ここ」つ左

凡に472末2所
4734行 2,062P

240年春(1433-2)
凡に472末35行
凡に473
473A

と思ひ病んでおいでだつたのですか
梯儂の途な望郷の思ひの言葉に驚いた乙
姫は、戸惑ひなから言つた。
ここに梯儂は、切なげに頷き、――そい
てまるで自らの胸の内の思ひを確認するかの
ように、ポツリ、ポツリと語つた。
「僕、近き親故いき俗を離れて、遠き神仙
のこの邪馬台国へやつてきたのでしたか、
指折り数えてみれば、――舊俗を遺れて仙
都に遊ぶこと、もう既に三歳になれます。
この日三歳(二四〇年春)二四三年春)
の間、私は國に幸せでした。――
今、忽に土を憶う心を起し、独り雨
親のこゝを恋ひ眷つて耐え切れないうちの
です。
梯儂の頬には、白く光るものが流れていた
瞼に浮かぶ父・母は、梯儂の心をいしきり
にせきたてるのだった。
――暫くのあつた梯儂は、目を膝の上に落
して何やら考え事をしてゐる風であつたか、

②-385P

2.063P-1/2

新行 472P 凡士 君夫 愛い 小林 399P 139P

1687P 握り締む

決然と顔を上げ、乙姫の両方の手をとってし
つかり握りしめると、こう言った。
「電比売。僕、望はくは、暫し本俗に還り
て、二親を拝み奉りとう存します」
乙姫の目からも涙が溢れていた。とめどな
く落ちる涙は、梯儼の胸元を濡らした。
「愛しのゆか君夫、私の君夫よ」
乙姫は、梯儼の胸の中で、いつまでも泣い
ていたが、やがて、そつと涙を拭う
と、げつそりやつれた梯儼の面差を見上げ
た。そして、悲歎に暮れながら曰った。
「私達二人の意は、金石に等しかった筈で
す。あの時、二人して常世の国へ邪馬台国
に参り、
海若の神の宮の内の重の妙なる殿
に携はり互いに手に手をとってあ
い、二人入り居て老いもせず死にもせず
↑ ↑ ↑
↑ ↑
うら 永き世に 共に 一緒に居りましょ

2,063^P-²/₂

几士に473^P

22-384^P

結婚の同意をし、お互いに堅い約束を交わして

と、万歳を期ったのに、
ういてまた一時に、わたしを置いて、
里を眷ったりなどなさるのでしよう、
二人は、相携へて徘徊り、相談ひて働き、
しむのだった。ハ、丹後国屈土記逸文、浦嶋
子糸。万巻九一七四〇、水江の浦島の子を
詠む一首（参照）

魏志倭 51P
↓ 2065P

2064P-1/2

2065P

2065P 5P
20

2060P
2063P 1/2 4P

伊勢者掖邪狗

非常に

梯儁の決意は固かった。引き留めようもな

くて、梯儁は暫し故郷へ帰る事となった。

ここに、倭人達は、こう考えるのだった。

魏国からの大使であつた梯儁殿を、中国

へただ単にお送りするだけでよいものではな

い。相應の地位のある者が、梯儁殿を帯方郡

へ送つてゆかなければならぬ。そして倭

国が遣わすその使者は、魏国の朝廷から賜わ

つた詔書と印綬等の返礼の爲に、

再び、魏国の都・洛陽へ赴き、礼を尽して朝

貢せねばならない。推古紀十六年九月条

参照

それが倭人が考える礼儀というもので

であつたろうか。

こうしたわけで、この年（正始四年、二四

三年）の四月か、五月頃、

帯方郡太守弓満が遣わした建中校尉梯儁

おはか云 300'
 推(量) 推測(推), 推量(推)
 電@ 推(測)
 2018-27, 13行

コクヨ ケー-20 20×20

$\frac{43}{100} \times 407 = 177$

少々やせしいものの、予め述べておきたいこ
 とがある。

① 先ず、**魏志倭人伝**の**魏志倭人伝**の
 本書紀の当該箇所を見ておく。

② 魏志倭人伝には、こう記されている。
 「其の四年（二四三）、倭王、復た使大夫
 伊聲耆、掖邪狗等八人を遣わし、生口、倭錦、
 絳、青、繅、繒、衣、帛、布、丹、木、狘、
 弓矢を上献す。

③ 神功皇后紀摂政四十三年（二四三）条には
 こう記されている。
 「魏志に云はく、正始四年（二四三）、
 倭王、復使大夫伊聲耆、掖邪狗等八人を遣
 上献す。

④ あるいは、次のように解すべきかも知れない。
 正始元年（二四〇）に、魏国・帯方郡の
 太守弓遵が、建中校尉梯儁等を遣わし、詔書・
 印綬等をもたらし、たことに對する返礼として、

2107-3/4

魏志倭人伝 51

天つき
改行

2,066^P

三年後の正始四年（二四三）に倭国は、伊聲
耆振邪狗（伊聲耆振邪約）等八人を（洛陽の
都に）遣わし、上献した。そこで中国の朝廷
は「伊聲耆」振邪狗等に、率善中郎将（等）
の印綬を与えた。といつた意味であうか。
■しかし、從來一般的には、「伊聲耆」と「振
邪狗」の二人を想定し、大使の大夫伊聲耆につ
いては定かでないが、振邪狗等が、率善中郎将
の印綬を壹拝したと解釈されてゐるようである。
・とはいへ、魏志倭人伝の正始四年（二四三）
条に、たとえば、
「倭王が大夫伊聲耆、振邪狗等八人を遣わ
し上献した。そこで、伊聲耆が率善中郎
将の印綬を拝受した」とある。とでも訳され
ておればまだしも、
「奇妙なことに、大夫伊聲耆が、率善中郎将
の印綬を、率善中郎将の印綬を拝受した」と
記されておる。甚だ疑問に思われ
る。

次郎から

2,067^P-1/2

銀印 50^P
銀印 2068^P-1/2

印中

また下 魏志倭人伝の景初二年(12.5 AM) 実は景初三

年(二三九)の誤り 十二月条に下

① ~~トル~~ 大夫難升米を日率善中郎将^{そうぜんちゅうしょう}と為^なし

銀印青綬を仮^かした下

② 次使^しの ~~トル~~ 牛利を日率善校尉^{そうぜんぎょうゐ}と為^なし

と記さ小ている。

・ した加つて、日率善中郎将^{そうぜんちゅうしょう}の銀印青綬^{ぎんいんせいじゆ}は

2,067^P - 2/2

前頁

また、率善中郎将の印綬は、景初三年（二三九）の誤りの十二月に大夫難升米に下賜された。高官（大使）に与えられた、という印象が強い。

● それなのに、

「正始四年（二四三）

大夫伊聲著にて

はなく、

振邪狗等複救名の者に率善

中郎将の印綬が下賜された

という。率善中郎将の印

綬の重さや、有難みが、ずいぶん減少するよ

うに思われる。

＊

とるれは

2.068^{P-1/2}

全ルビ
① 1393
② 1676

こと

天主改行

■ それでは、魏志倭人伝の正始四年（二四三）

条には、どうしたわけで、

「大夫伊聲耆掖邪狗等八人を遣わし、
一、を上献す。掖邪狗等、率善中郎将の印綬
を壹拝すし

と記されてゐるのだろうか。

・ここに、魏志倭人伝の景初三年（二四二）
（二二九年）十二月条を見ると、

（注）のたー

「大夫難升米次使都市牛利を送り、一、
一、を奉り以て到る。一、一、難升米を以つ

て率善中郎将と爲し、牛利を率善校尉と爲し
銀印青綬を授け、引見勞賜し遣わし還す」

とある。第十八章「朝貢の儀」、第二十四章「倭の女王曰御子」の項

「つまり、次使都市牛利」の「都市」を省略

し、「牛利」と述べていて注目される。

・なお、
の二人

「大夫難升米」。「次使都市」。「牛利」

の三人の使者のうち、大夫難升米と牛利だけ
に銀印青綬が下賜された、と理解する人はい
ないようである。だ

この先から類推するとき、
大夫伊聲耆掖邪狗という一人の男の名を
略して、下の方だけをとって、「
と記述したのであらう」
と想到される。
「まり」大夫伊聲耆・掖邪狗と区切つ
て読むのではなく、一連に「大夫伊聲耆掖邪狗
と読むべきであらう」と考えてみたい。
「
大夫伊聲耆掖邪狗等八人を遣わし、上
献す。掖邪狗等率善中郎将（等）の印綬を
拜す」
と記述されていたのから知れる。
④ともあれ、
①景初三年十二月、大夫難升米を率善中郎
将と爲し、次使都市牛利（牛利）を率善校尉
と爲した。大使の
②正始四年、大夫伊聲耆掖邪狗（掖邪狗）
に率善中郎将の印綬を与え、次使のあるいは
次使以下の者にも、それなりの印綬を与え

下

④1246P
2057P-1/2(こと)

2,069P

・三國志(正) 原文(赤) 590P 皆「狗」であり「物」ではない。 ④2169P
魏志倭人傳 83P ④2065P わかやこ ④1247P 末5行
わかこ ④1246P (こと)

意味
この頁13行

ということなのであらう、と解いてみたい。

*

とすると、大夫伊聲者掖邪狗ニ
者掖邪狗)とは、一体、どのような人物だっ
たのだろうか。

それは定かでない。

しかし、先述の~~ト~~ように、

ヘ^{わかやこ}曰^{わかやこ}伊聲者掖邪狗ニ^{わかやこ}とは、
若子^{わかやこ}曰^{わかやこ}伊邪国の若子^{わかやこ}ニ^{わかやこ}曰^{わかやこ}伊邪^{わかやこ}の^{わかやこ}

紗別^{わかやこ}軍・月詠命^{わかやこ}の^{わかやこ}ことであらう

と、この物語では考えてみることにしよう。

(第十六章へ大夫伊聲者掖邪狗)の項において
て既述)

*

④2064P
1/2 29

ひに
秘事
秘め事

長い
こと 2072 2070^P
-1/2 1847 2070^P

楽しい 2073^P

こと 2074^P
2075^P
2076^P
2077^P
2078^P
2079^P
2080^P
2081^P
2082^P
2083^P
2084^P
2085^P
2086^P
2087^P
2088^P
2089^P
2090^P
2091^P
2092^P
2093^P
2094^P
2095^P
2096^P
2097^P
2098^P
2099^P
2100^P

おいとまごい
退り去り、岐路に就くこととなった。(一) 丹
後国風土記逸文(浦嶋子参照)
へああ、楽しい日々を過ごした美しい都、邪
馬台国の洛陽の都よ、
思い出が次から次へと梯儼の胸に去来して
涙が袖を濡らした。
「梯儼様ともこれでいよいよ、暫お会い出
来ないのですね。―――けれど私は、また
の逢瀬を心算にしてみにして、貴方様のお歸りを
とお待ち申し上げておりますわ」
二人はヒシと抱き合い、涙に咽んだ。乙姫の
ぶんわりとした領巾が、梯儼の腕を覆って打ち震えた。
そんなとき、乙姫は、決して忘れてはなら
ないことを心の内に思い起こして、
「あ、梯儼様、私、―――今の私を封じてお
かなければならないのよ」
と小さく叫んだ。
そして乙姫は、
「ある密か事をしなくてはなら
ません。―――二人にとって

2060.2.25
H10.8.11 写本、5生

「一心に」2075
「心を」2075
2,071 P

「心」2075
「心を」2075
2,071 P

2260%上 (主に大学書あり)
1332 P

すぐ戻って参りますので、
お待ち願えませんでうか
と云うと、梯僦を宮殿の一室に残し
祭壇の大嘗宮へと消えていった
乙姫は、さらに泣いていた。泣きながら、
天の神に祈りを捧げるのだった。
「ぜひとも、ぜひとも、あのお方をすぐに
私のこの胸へお返し下さい」
夫・梯僦が早く、忽ちのうちに邪馬台
国へ帰って来るようにと請願し、唱える呪文は
ともすれば、涙に途絶えがちであった。
「か、涙声を請らせながら、乙姫
は、一心に、み伏し、神の御加護を求めて祈
りつづけた。を付けた神
緑葉い艶やかな葉が打ち振られ、
細枝に取り懸けた
が空を切り、ヒューヒューと鳴った。
祭壇の中央にただ一つポツンと置かれている小
さな真澄の鏡が、尾を引きつつ行き来する
その四手の白さを、くつきりと写していた。
と、乙姫は、打って変わって晴れ

突如 水戸8行下

一寸 ちよつと

前頁 9行

ゆたゆた 元 Z380^P
ぶるぶるまき
(ぶるぶるまき)
つば 元 1492^P (やがて
突っ伏す ついに
その決り4月)

つばい 元 (やがて)
突っ伏す 1492⁷ ついに
その次は4行

$$2,072^{P-1/2}$$

一撫一息 2154^P 艷容 258^P
佐秋在99^P $-\frac{1}{2}$

のす
 司見 < 玄
 梨い
 ④ 2073, 2074"

⑧ 2073, 2074
 やかな麗しい面差しとなり
 へ嬉しくて嬉しくて仕方がない
 といった様子で、そつと鏡の中を覗き込んだ
 あたかも、その美しくも輝かしい顔を鏡
 の内に閉じ込めておこうとするかのように、
 乙姫は、いつと己の艶容に見入
 り、微笑みつづけた。
 こうしてど小程たった頃か、乙姫は、突如
 鏡の周縁部を一撫でし、熱い息を吹きかける
 と、狂ったように叫んだ。
 「靈魂よ、宿れ」
 乙姫は、手に持っている玉串を激しく右へ左へと
 振り揺り、―――やがて、感極まったかのよ
 うに、全身をゆなゆなと打ち震わせた。
 そして、柵の枝を高々と頭上に差し上げた
 その瞬間、意識をなくした乙姫は、力なえて
 ドウとばかり床に突っ伏し倒れた。
 血の気が失せた顔色は蒼白となり、黒髪は
 はらりと広かって、―――そのまま静止した。
 乙姫の息さえも途絶えて―――まったのだろうか。

305

2.072^P - 2/2

⊕ 2105^P

おぐま え はん はん え
玉の小柳 139^P 深々 沈黙 1153^P
たお へ ふ 顔 ねる え 625^P

米

いやりとした床に光っているばかりであった
に、髪から転がり落ちた玉の小柳が一つ、ひ
ただ、くずれるように倒れ伏したその拍子
のようであつた。
中に、~~全て~~が止まってもか埋没してしまつたか
静寂の

たひゆき 元
旅行 1393
出立 元 1069

とと 元 999
ひとく
甚だしく

いと おは 元 138
せつ 切な 元 1251

2,073 P

いと 暇 元 139
楽しい 元 2070 5行

いつく 離別 悲む 元 130
大なる

由次郎 8行
泣き席ぬ

さすが、ゆめでは、これにてお暇申し上げま
す。亀比売、どうぞそのお身体だけは大切に
慈んで、健やかに過ごして下さい。――
梯儂は、真赤に泣き腫らした吾妹子の目をい
とおいげにいつと見つめ、胸しめつけらる
ような切ない思いで言った。
すると乙姫は、悲しみの涙あふれる目で愛
する梯儂を見上げながら言った。
「とうとう、御出立の時が来たのですね。
梯儂様こそ瀚海（玄海）の荒波を渡っての旅

乙姫の目にも、梯儂の目にも涙があつ
た。互いに泣きながら、泊瀬の白川の岸辺で
手を取り合い、別水を惜しんだ。
「あまりにも楽しい思い出多いこの邪馬台国を
後にするのは身を裂かれるように辛うござい

— 54-101³

炮台
 搖動 語調を整
 意味を強め

時 1600P
 1611P

560, 3, 2 (6)
 $\rightarrow$ 410, 8, 12

$$2.076^P - 1/2$$

④ 2073' 元
11とあり 138'

念じていとう存します
 その意味するところはもう一つ詳らかでな
 かったが、しかし乙姫の一寸な心がいらい
 しく思われ、梯傷は玉匣を自らの胸に押し
 当ててこう言った。
 「分りました、亀比売殿。私はこの美しい
 玉の匣をあなただと思ひ、大切にしまひ置
 りとも手元から離したりはいたしません。そ
 して、きつと貴女のもとへ戻つてまいりま
 しょう」
 「まあ」
 乙姫は、にっこりと微笑み下
 「そのお言葉をお聞き致しまして、本
 心から嬉しく思ひます」
 と言つた。
 「しかし、その笑顔は、たちまちにして
 表情へと一変した。
 乙姫は、梯傷の目の奥を見つめ、かつた
 いほどの厳肅な面持ちで、こう言うのだ
 った。
 「時に梯傷様。是非御心に留めておいて

船家 1956

とあ 元 遠き 1583

万巻-385
几帳に473
「船に乗る」とある

2,076²-³/₂

こと

じんつうりきえ
神通力 1159⁺

あ 開ける 26
開く なゆめと 万巻-385

頂きたいことがござります。
ゆめゆめ、この玉手箱の蓋を開けてみたり
などなさらないように、充分ご注意願いたい
のです。
もこの蓋をあけ放とうものなら、私の
神通力も、そーてこの箱の靈妙な力も萎え果
ててしまつて、ーーー二人の身に、恐ろ
い禍が降り懸つてくるでーよう。
どうか、どんなことがあつても、この蓋だ
けは決してお開けにならないように、く小ぐ
小もお願ひ申上げますし
こーつてついに相分れ、梯候は日船の
上の人となつた。(「丹後国風土記逸文」へ浦
與子✓条。万巻九一七四の参照)
美しい白川の流水に棹さながら、ゆるゆ
ると下つて行くその船は、悲しくも次第に遠
ざかつてゆく。
そーて、船べりから身を乗り出し、手を打
ち振る愛する人の姿も、小さく、小さくなつ
ていつた。

こと

こと

2,077^P

正徳4年(243)
2064½ 4月~5月頃

涙なからに領巾を振り続けている乙姫の目
には、その人の姿が滲んでいった。
「梯儼さま——」
だか、梯儼を乗せた船は、朧な霧の中に
吸い込まれるように淡く霞んでゆき、——
とうとうその影さえも、ふっと消えてしまっ
た。

*